

## 市民シンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」

### 趣旨説明：人類の生成と消滅

森中 定治（日本生物地理学会、放送大学埼玉 SC）

日本生物地理学会は、昭和3年（1928年）フランスに次いで世界で2番目に山階芳麿博士、黒田長禮博士ら当時の著名な鳥類学者の助力を得て、鳥類学者の蜂須賀正氏博士と東京大学理学部教授で生物地理学の第一人者であった渡瀬庄三郎教授によって設立されました。

蜂須賀正氏博士は、平成15年（2003年）に行われた生誕百年記念シンポジウムにおいて“型破りの人”と評されました。自己の信念と哲学に基づいて時代を駆け抜けた人でした。渡瀬庄三郎教授は、区系生物地理学における旧北区と東洋区の境界を示す“渡瀬線”によって著名であり、ジャワマンゲースを移入しました。現在は特定外来生物として駆除の対象とされますが、当時困っていた野鼠やハブの被害を防ぐために生物学の知識を社会に役立てようと積極的に行動した強いパワーの持ち主でありました。日本生物地理学会創設者のこのような人となりを考え、学問を専門家の枠に留めることなく、人類社会に活かすことができればと思います。専門の研究発表や生物学に関わる正規のシンポジウムとは別に、この一般公開市民シンポジウムをもつのはこのような理由によります。

生物学の原点は博物学と分類学にあります。16世紀に英国が世界を股にかけて版図を広げました。見たこともない動物や植物を採集して標本にし、そしてそれを分類しました。生物地理学は世界の動物や植物がある特定の場所を境にしてガラッと変わります。その境界線を見つけ出し生物地理区を作成する学問として出発しました。昨今の分子生物学の発展に伴い現世における生物地理区だけでなく、生物の誕生以来の歴史、時空を超えた学問として発展途上にあります。その意味で時空生物学と言い換えることができます。

今年の市民シンポジウムは「人類の生成と消滅」と題して、お二人の専門家にご講演をいただきます。人類は約700万年前に類人猿から分岐し、樹上から地上に降りそして平原に出ました。それから地上での狩猟採集生活の時代が長く続き、1-2万年前になって農耕が始まり食物を貯蓄できるようになりました。人類はいつ、どのような契機で戦争をするようになったのでしょうか。

一方で、我々が生活を営む現代の人類社会は、どのような形で消滅するのでしょうか。日本には1億2千万人が住み、先進国として多様な食べもの、清潔な水、そして高い利便性を享受しています。中国には14億1千万、インドには14億2千万の人がいます。ともに日本の10倍以上です。この人たちが先進国を追いつけ追い越せと世界的な展開を図ります。しかし、それらの国が生活の利便性において、日本と同レベルに至るためには地球が2.5個必要です（拙著『プルトニウムを解毒し脱原発・脱核兵器への道を切り拓く「生物学」的思考法』）。地球を2.5個にすることは不可能です。ゆえに、我々が公正と認め標準にしている現在の自由主義、資本主義のルールが破綻し、現在の人類社会の終焉が来るのは論理的な帰結のように思えます。

人類は、これをどのように平和裡に乗り越えるのでしょうか。  
これこそが、我々現代人類の究極の課題ではないでしょうか。

「善悪に関心持たぬテクノロジー」 崩彦（中畑流万能川柳 2018.10.3）

この市民シンポジウムでは、過去3回連続して「人間の持つ真の利他性」を根幹のテーマとして開催しました。たくさんの様々な講演者、論評者にお出いただきました。私自身もこの市民シンポジウムを通して成長し、昨年未発行の日本生物地理学会会報第78巻に『「真の利他性」は人類のパラダイムを変える』という論考にまとめました。人間は利己性を持っています。エゴイズムとも私欲とも言えるでしょう。それは悪いことではありません。それがなければ人類社会の秩序を保っていくことができないし、何より生物として存在することができません。生物としての第一究極因です。でも人類が持つものはそれだけではありません。「真の利他性」という第二究極因も持っています。それをこの論考で明らかにしました。

これからの人類の未来を指し示す道標は、この第二究極因が大きな働きをする  
と私は考えます。人類はこの第一究極因と第二究極因が合わさった、言葉を代え  
れば利己性と真の利他性が合わさった存在だと、今は思っています。そしてこの  
人間への理解こそが、戦争など人間の利己性に由来する争いに終止符を打ち、自  
然科学の発展によって見出されたさまざまな技術が真に人類の有益になると考え  
ます。

現代は人新世と呼ばれますが、この人新世の時代はそれを見出すための時代で  
あると、そう思います。